

# ポーランド・メシアニズムにかんする覚書

## ヘーネ＝ヴロンスキの「絶対」の哲学

川名隆史

### はじめに

18世紀の世紀末は、ポーランドに国家の消滅という悲劇をもたらした。世紀半ばに始まった改革は、その途上で様々な喜劇的な出来事を伴いはしたが、分割という出来事それ自体は、ポーランド人にとってまぎれもなく「悲劇」であったし、また「悲劇」でなければならなかった。悲劇の犠牲となることで、多少の時間が必要ではあったが、やがて救済原理の出現が促されるからである。

19世紀のポーランドは、よく「蜂起の時代」(era powstań)という言葉で表される。蜂起は戦いであって、戦士は他国による支配からのポーランドの解放という使命感を抱いて戦場に赴いた。しかし勝利の女神は微笑まない。その使命は正義であったはずなのに。度重なる敗北、とりわけ1830-1831年の11月蜂起の敗北は、この歴史にある決定的な転換を引き起こした。「大亡命」(Wielka Emigracja)と呼ばれる、大量の革命家・戦士の西欧への脱出によって行き先の西欧を舞台とする新たな劇の演出が始まる。

1830年代から1850年代にかけて、パリ、ロンバルディーア、バルカンを股にかけて駆け回ったアダム・ミツケヴィチ(Adam Mickiewicz, 1798-1855)という人物がいる。ポーランドのロマン主義を代表する詩人として、また「大亡命」の一翼を担って分割国との戦いに邁進する革命家として、ポーランド史においては際立って称賛された。そしてまさにポーランドを代表する民族詩人と位置づけられた。ポーランド・ロマン主義のシンボルとも言える、このミツケヴィチの思想の根幹をなしたのがメシアニズム(mesjanizm)であった。ポーランド人の政治的「悲劇」をキリストの受難に擬し、やがて復活するポーランドがメシアとして世界を解放するという図式である。主に亡命地を舞台に展開された、ポーランド・ロマン主義の神髄とも言える、このメシアニズムの出自を探ろうというのが小論のささやかな目的だが、そこにプラトン主義との関わりを示唆出来れば望外の幸いである。

### 1. ポーランド・メシアニズムについて

元来メシアニズムは、いわゆる千年王国主義(millenaryzm, chiliazm)と結びついた救済の型式と位置づけられてきた<sup>1</sup>。終末論的な状況の中に、救済者すなわちメシアが現われ、地上

<sup>1</sup> 両者の類縁性には疑いはないが、そこに一定の区別を求める向きもある。Walicki A.,

に神の王国を築き上げる。メシアは神に選ばれた人かもしれないし、受肉した神かもしれない。あるいは集団(multiple messiah)かもしれないし、場合によっては人間という属性を越えた存在かもしれない。あるいはまた、ある運動のカリスマ的な指導者かもしれないし、預言者かもしれない。多くの場合、彼らは神の使いという性質を帯びるが、常にそうとも限らない<sup>2</sup>。

19世紀のメシアニズムは、このような宗教的属性との関わりを曖昧にしたまま成立した。西欧においてこの時期にメシアニズム的、従って千年王国的な思想が開花したのはフランスである。フランスでは、大革命とその後の混乱、ナポレオンへの期待と幻滅など、様々な混乱要因が入り組んで、まさに終末論的様相を呈していた。啓蒙主義者の幻滅を乗り越えて、新たなユートピアすなわち千年王国の理想が、哲学的な世界観として提示された。たとえばサンシモン、フーリエ等による産業組織に基づくユートピアの構想、またコントに見られるような新たな宗教の創出も、その理想の現実化の試みであり、それぞれの思想家をメシアとする新たな教団が誕生する。

ポーランド・メシアニズムは、亡命地とりわけフランスで、同時代の種々の思想的営為の作用を受けて形作られていった。特にフランスで展開されたそれが大きく影響したことは疑いない<sup>3</sup>。啓蒙主義的改革の挫折、分割による国家の喪失といった事態が、フランス革命とその後の混乱とパラレルに終末論的状况を現出させていた。ナポレオンに対するアンビヴァレントな感情も同様である。しかも11月蜂起の敗北は、解放の課題を背負った多くのポーランド人をパリに集結させ、ポーランド人の知性のある部分を千年王国の磁場に引き寄せた。

ポーランド・メシアニズムは、ポーランド分割によって失われた国家の再興を目指す戦いが幾度も敗北を重ねるうちに、ポーランド国家再興への特殊な意志が全人類を解放する普遍的使命の自覚へと昇華して形作られた。分割とその後の蜂起敗北は贖罪と位置づけられ、そのことによって将来の解放が確実なものとして予測される。国家を奪われたポーランド民族は原罪を背負って磔にされたキリストに擬され、ポーランド民族は悪の表象、抑圧の象徴であるロシアを始めとする分割国との戦いに勝利し、同じく抑圧された諸民族のメシアとなって地上に神の王国を作り上げていくという図式である。メシアニズムは、ポーランド人の悲劇的な歴史的経験を、将来のオプティミズムに彩られた世界観へと転換する装置として案出されたとも言える。

---

*Filozofia a mesjanizm. Studia z dziejów filozofii i myśli społeczno-religijnej romantyzmu polskiego, Warszawa 1970, s. 10-11.*

<sup>2</sup> ユダヤ教でいえばサバタイ・ツヴィ(Sabbatai Cwi)、ヤクブ・フランク(Jakub Frank)などがそれにあたるだろう。

<sup>3</sup> ヴァリツキは、ほぼ一面的にフランスの影響を強調する。確かにその傾向は顕著ではあるが、例えば小論の対象であるヘーネ＝ヴロンスキがカント哲学を出発点としているごとく、その成立の過程は錯綜している。zob. Walicki, *op. cit.*, s. 22-23.

民族の解放すなわちポーランド国家再興を経て、人類の普遍的解放を担うことが、ポーランド民族に神から与えられる使命だとすれば、それがあらかじめ誰かにより、何らかの方法で知覚、認識されていなければならない。すなわち神の意志の啓示のあり方が、メシアニズムの性格を決定づけることになる。この点をめぐって、ポーランド・メシアニズムを三つに類型化した例がある。それは、[1]預言的あるいは哲学的メシアニズム、[2]道徳的完全主義のメシアニズム、[3]詩的メシアニズムあるいはまた靈感のメシアニズムという区分けである。

[1]においては、「メシアの真理」(prawda mesjanistyczna)は基本的に合理的な性格を有し、それは知的直観を通じて預言者たる人物、すなわち神から選ばれたメシアに啓示される。真理は概念として把握され、歴史とともにより高次の、より完全なものへと進んで行く。小論の対象とするヘーネ＝ヴロンスキ(Józef Maria Hoene-Wroński, 1776-1853)、チェシュコフスキ(August Cieszkowski, 1814-1894)がこの類型の代表者とされる。[2]のそれは、ミツケヴィチとその師トヴィアンスキ(Andrzej Towiański, 1799-1878)のもので、ポーランド・メシアニズムの政治的側面において際立つ潮流と言える。真理は概念として哲学的に体系化されるものではなく、秘義的(ezoteryczny)なもので、「自己犠牲と苦悩」を経た選ばれた者によって得られる道徳的完全性のもとでのみ知られるものであった。それは、道徳的完成と悪を打ち破る強烈な意志が求められる、倫理的規範の体系として捉えることができよう。[3]はある程度前二者の中間、あるいはそれらの総合と位置づけられており、真理の獲得と開示における「詩的灵感」(natchnienie poetyckie)の意味を重視する。そしてそれは靈感を受けた詩人の言葉により、詩や劇の中に埋め込まれる。ミツケヴィチと双璧をなすスウォヴァツキ(Juliusz Słowacki, 1809-1849)やクラシンスキ(Zygmunt Krasiński, 1812-1859)がその代表とされ、その作品は後世に多大の影響を与え続けた。

これらの潮流、人物のうち、ここでは歴史的に最も先行し、ポーランド人の著作の中で最も早くメシアニズムの語を用いたとされるヘーネ＝ヴロンスキという人物に着目し、ポーランド・メシアニズムのプロトタイプとも言うべき彼の思想をかいま見ることにする<sup>4</sup>。

## 2. ヘーネ＝ヴロンスキという人物

ヘーネ＝ヴロンスキは1776年に、プロイセンとの国境に近い小都市ヴォルシュティン(Wolsztyn)に生まれた。父はボヘミア出身の建築関係の役人とあるから、出自からするとチェコ人と言えるかもしれない。ポズナン、そしてワルシャワ(おそらく士官学校)で学んだ後、18歳でコシチウシュコ蜂起に参加し、大尉として砲兵中隊を指揮した。マチェイヨヴィツェの戦い(bitwa pod Maciejowicami)で捕虜となり、その後ロシア軍に加わる。元帥スヴォロフの司令部に配属されて少佐に昇進するが、1797年に退役し、西欧に向かった。1797年から1800年にかけてハレ(Halle)とゲッティンゲン(Göttingen)で法学と哲学を学び、ここでカント哲学に接した。1800年にイタリアのポーランド軍団に加わるためパリ経由でマ

<sup>4</sup> *Słownik literatury polskiej XIX wieku*, Wrocław itd. 1991, s. 538-540.

ルセイユへ行くが、何らかの理由でそこに留まり、フランスの市民権を得て測候所に職を得た。

マルセイユですでに彼は幾つかの著作をものしているが、1803年のカント哲学の解説書は、最も早期にカントをフランスに紹介したのものとして評価されている。だがヘーネ＝ヴロンスキにとって、この1803年は彼の人生の行方を決定づける年となった。この年の8月15日に彼は啓示を受けた。「突然、靈感の煌めきの中で、奥義が知らされ、万物の始原とその究極目的が開示された」のであった。以後彼は、自身が啓示を受けたメシアであり、世界の完全な再構築を使命とすると自覚する。そこに進み道は知すなわち学問の改革であり、その第一歩は数学の改変だとされた。数学は他のあらゆる科学の模範であり、ひとつの普遍原則すなわち「最高のアルゴリズムの法則」(prawo najwyższego algorytmu)から導かれる新たな学問体系の構築を志した。一見コントの実証哲学体系との近似が認められるが、コントの著作が出るのはまだまだ先のことである。

ヘーネ＝ヴロンスキは1810年頃に結婚し、学問の成果を世に出さんとパリに移る。彼はアカデミーに一連の数学に関する論文を提出するが認められず、ロシア大使館から援助を得て、ツァーリ・アレクサンドル1世へ献上する形で数学の著作を自費出版した。これによって財政難に陥るが、ニースのある銀行家の援助を取り付け、著作の出版を続けた。後にこの銀行家が破産に瀕して資金の返還を求められたが、裁判の結果、かなりの資金を手許に残すことが出来た。彼はこれを種々の発明、自然科学や哲学の著述、また自身の党派形成に費消した。1819年に至るこの時期に著された『人類の絶対的創造』という著作によって、メシアニズムの基本的型式が明らかにされた。

しかし再び文無しになったヘーネ＝ヴロンスキは1820年に、海上での距離測定技術にかんするコンクールに参加するためイギリスに渡るが論文は落選してしまう。ロンドンのロシア大使館から援助を得たが、それも論争のための出版に費消した。貧困のうちに1823年にパリに戻るが、この頃から次第に歴史哲学、社会、宗教の問題へと関心が移動する。それらの研究を経て、1830年代に至ってメシアニズムを本格的に喧伝し始める。1831年の『メシアニズムの予兆』でその詳細を語り、また同年のツァーリ・ニコライ1世に宛てたメモリアルで、スラヴ民族が果たすべき神意に基づく役割の預言者として自らを位置づけた。

1830年代末から、有力な出版業者タイエル(E. Thayer)と親交を結び、その援助の下で多くの著作を出版した。しかし本は売れず、発明も芳しくなく、やがて決別する。オテル・ランベール(Hotel Lambert)からの援助で食いつなぐヘーネ＝ヴロンスキに、最後のパトロンとして音楽家のドゥルット伯(hr. Kamil Durutte)が現われ、彼をメッスに招き出版を支援したが、1853年8月にヘーネ＝ヴロンスキは生涯を終えた。

ヘーネ＝ヴロンスキは著作をすべてフランス語でなし、しかも1830年代にポーランドやスラヴ世界に言及するに至ってもなお、その関心は多岐に渡っていた。そのためポーランド人亡命者がヘーネ＝ヴロンスキを「発見」するのは遅れた。しかしミツキェヴィチやチェシュコフスキを始め、多くのポーランド人がやがて彼の思想に触れ、ポーランド・ロマン

主義の、とりわけメシアニズムの形成に多大の影響を及ぼしたことは間違いない。死後も後継者によって出版が続けられた。またポーランド独立後の1921年に、信奉者によりワルシャワに「メシアニズム研究所」(Instytut Mesjanistyczny)が設立され、多くの著作がポーランド語に翻訳され出版された<sup>5</sup>。

### 3. 「絶対」の哲学

ヘーネ＝ヴロンスキの出発点はカントにある。しかし、カントの体系には「総体的な体系化、統一に欠けており、それは理性をもってしてさえ達成できないでいる」としてその限界を指摘する<sup>6</sup>。物質と精神、存在と知の対立の一元化を求める過程で、「絶対」(absolut)というものを構想する。フィヒテ、シェリングそしてヘーゲルへと連なるドイツ観念論の形成とほぼ並行的に、形而上学的な絶対の哲学が完成したと言える。以後、ヘーネ＝ヴロンスキの思想体系の中心にこの「絶対」が置かれ、後に具体的な姿を取るメシアニズムの思想の本質をなして行く。

しかしヘーネ＝ヴロンスキは、この「絶対」というものを具体的に定義はしていない。様々なところで様々な意味合いで用いられている。ある時は「神」(Bóg, Gott)、また「精神」( duch, Geist)、 「真理」(prawda, Wahrheit)、 「理性」(rozum, Vernunft)、あるいはカントの「物自体」(rzecz sama w sobie, Ding an sich)といった具合に多様であり、また形容詞として用いられると更に多義的となる。「あらゆる存在と知の源泉(=絶対)は存在と知を越えるものであり、存在論的規定も認識論的規定もありえない」とすれば、それも当然であろう<sup>7</sup>。このように曖昧であると同時に、ヘーネ＝ヴロンスキの思想の根本をなす「絶対」というものについて、いくつかの側面からその意味を捉えてみよう。

まず「絶対」はその本質において、「それ自身のうちに自らの存在の条件を有する創造力(sila twórcza)」であり、それゆえ「そこには創造の法則(prawo tworzenia)、すなわちあらゆる現実を導き存在させる現実的条件のシステムが含まれている」<sup>8</sup>。あらゆる存在の原因であって同時にその存在の原理でもある「絶対」とは、ヘーゲルの絶対者を思わせるが、ヘーネ＝ヴロンスキは直接その名を挙げてはいない。

---

<sup>5</sup> 年譜などについては、*Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*, Warszawa 1977. および Sikora A., *Antypody romantycznego mesjanizmu - "Filozofia absolutna" Hoene-Wrońskiego i mistyka Towiańskiego*. w: *Polska myśl filozoficzna i społeczna. Tom 1*, Warszawa 1973. に依拠した。また小論においては、すべて *Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*. に収録されているポーランド語訳を使用した。

<sup>6</sup> Hoene-Wroński J., *Filozofia kryczna odkryta przez Kanta*. w: *Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*, s. 111.

<sup>7</sup> Tatarkiewicz W., *Historia filozofii. Tom 2*, Warszawa 1983, s. 230.

<sup>8</sup> Walicki A., *Polska myśl filozoficzna epoki międzypowstaniowej*. w: *Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*, s. 19.

「絶対」はまた、「進歩の法則」(prawo postępu)、すなわち宇宙の物理的生成に対する、「進歩的後退、宇宙の道徳的起源、すなわち神の「絶対」への回帰」としても捉えられている<sup>9</sup>。これによって「絶対」は時間の契機を与えられ、創造の原因と目的を追い求める倫理として理解される。人類の究極目的を把握する条件とされた「絶対」は<sup>10</sup>、時間的経過のうちその存在のあり方を変えてゆくものとして、歴史哲学の中に位置づけられることになる。「絶対」の希求(dążność do absolutu)が、こうして永遠の当為となることによって、ヘーネ＝ヴロンスキの中に再びカント的世界が現出する。

歴史の中で「絶対」を追い求めることは、それぞれの時代において「絶対」の現実に応じた目的、すなわちそれぞれの最高目的(najwyższy cel)が存在する<sup>11</sup>。歴史は4つに区分され、オリエント時代は物質的、ギリシア・ローマ時代は道徳的、中世は宗教的、近代は精神的な目的を持つとされた。そしてヘーネ＝ヴロンスキ自身の同時代である19世紀は、まさに善を求める保守的な陣営すなわち宗教と、真理を求めるリベラルな陣営すなわち学問とのつばぜり合いの時代であった<sup>12</sup>。それは啓示宗教(religia objawiona)から自然宗教あるいは理性宗教(religia dowiedziona)へと進む時代であり、まさに「絶対」が現実性の束縛を脱して究極目的の把握への道を開く時代であった。

人間は被造物として物質的(chrematyczny)世界に属すと同時に、理性的存在として非物質的(achrematyczny)世界にもあり、「創造の力」を備えて「新たな創造者」のランクにも達しうる<sup>13</sup>。思弁哲学を超越し、カントの物自体の世界に匹敵する、この非物質的世界こそ、実践哲学の対象であり、それが「メシアニズムの本質的部分」をなしている。こうして「新たな実践哲学」が、個人の自由で自発的な規範としての道徳律(prawy moralne)と同時に、「理性的本質の絶対的目的」すなわち「新たな創造者 […] [による] […] 地上への絶対的な善の創出を目指すメシアニズムの法(prawa mesjanistyczne)」とを含み込むのである<sup>14</sup>。

結びにかえて

ミツケヴィチのような政治性は持たず、トヴィアンスキのような宗教性とも無縁に、ヘーネ＝ヴロンスキは新たな知の体系化を夢み、同時に錬金術的な発明に明け暮れた。「蜂起の時代」の喧騒の中で、ヘーネ＝ヴロンスキが亡命地でポーランド人の蜂起路線と具体的にどう関わったかは、実は明らかではない。やがて彼は、「ドイツ人の思弁的使命」や「フランス人の実践的使命」という個別化された課題を総合し、理論的、道徳的、政治的

---

<sup>9</sup> *Ibidem*.

<sup>10</sup> Hoene-Wroński J., *Ostateczny cel ludzkości. w: Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*, s. 118-120.

<sup>11</sup> *Ibidem*.

<sup>12</sup> Tatarkiewicz, *op. cit.*, s. 231.

<sup>13</sup> Hoene-Wroński J., *Ostateczny cel ludzkości. w: Filozofia i myśl społeczna w latach 1831-1864*, s. 154.

<sup>14</sup> Hoene-Wroński J., *Ibidem*, s. 155.

な使命をスラヴ世界の役割とする、ロシアを主体とするスラヴ主義の方向に進む<sup>15</sup>のであるが、そのプロセスについては稿を改めたい。またヘーネ＝ヴロンスキのこの形而上学が、はたしてプラトニズムの痕跡を有しているかどうかについても、ここでは言及できない。非物質的な叡智界への道をなす「絶対」の哲学にその類縁性をみる事はたやすいであろうが。

\*\*\*\*\*

ヘーネ＝ヴロンスキの主な著作

*Philosophie critique découverte par Kant fondée sur le dernier principe de savoir* (Marseille 1803).

*Création absolue de l'humanité* (1814-1818: 1819に概要のみ出版)

*Messianisme. Union finale de la philosophie et de la religion constituant la philosophie absolue.*

(Tom 1:) *Prodrome du messianisme. Révélation des destinées de l'humanité* (Paris 1831).

(Tom 2:) *Métapolitique messianisme. Désordre révolutionnaire de monde civilisé* (Paris 1839).

*Secret politique de Napoleon, comme base de l'avenir du monde* (Paris 1840).

*Le destin de la France, de l'Allemagne et de la Russie comme prolégomènes du messianisme* (Paris 1842).

*Réforme absolue et par conséquent finale de savoir humain* (Paris t. 1 - 1847, t. 2 i 3 - 1848).

*Adresse aux nations slaves* (Paris 1847).

*Les cent pages décisives, pour L'Empereur de Russie* (Metz 1850).

*Philosophie absolue de l'histoire ou genèse de l'humanité* (Paris 1852).

*Développement progressif et but final de l'humanité* (Paris 1861).

*Apodictique ou Traité du savoir-suprême* (Paris 1876).

*Développement de la philosophie absolue* (Paris 1878).

*Philosophie absolue, Premiers travaux. Sept manuscrits inédits écrits de 1803 à 1806* (Paris 1879).

その他、主な参考文献

Gawecki B., *Filozofia praktyczna Józefa Marii Hoene-Wrońskiego*, Warszawa 1971.

Łukomski L., *Twórca filozofii absolutnej. Rzecz o Hoene-Wrońskim*, Kraków 1982.

Sikora A., *Antypody romantycznego mesjanizmu - "Filozofia absolutna" Hoene-Wrońskiego i mistyka Towiańskiego*. w: *Polska myśl filozoficzna i społeczna*. Tom 1. Warszawa 1973.

Sikora A., *Dwie postawy mesjanistycznej*, w: *Problemy polskiego romantyzmu*, Wrocław 1981.

Sikora A., *Myśliciele polskiego romantyzmu*, Chotomów 1992.

---

<sup>15</sup> Sikora A., *Hoene-Wroński. Absolut i historiai*. w: *Filozofia polska*, Warszawa 1967, s. 154.

- Sikora A., *Posłannicy słowa. Hoene-Wroński. Towiański. Mickiewicz*, Warszawa 1967.
- Ujejski J., *O cenę absolute. Rzecz o Hoene-Wrońskim*, Warszawa 1925.
- Ujejski J., *Dzieje polskiego mesjanizmu do powstania listopadowego włącznie*, Lwów 1931.
- Walicki A., *Filozofia a mesjanizm. Studia z dziejów filozofii i myśli społeczno-religijnej romantyzmu polskiego*, Warszawa 1970.
- Walicki A., *Millenaryzm i mesjanizm religijny a romantyczny mesjanizm polski*, w: *Między filozofią, religią i polityką. Studia myśli polskiej epoki romantyzmu*, Warszawa 1983.